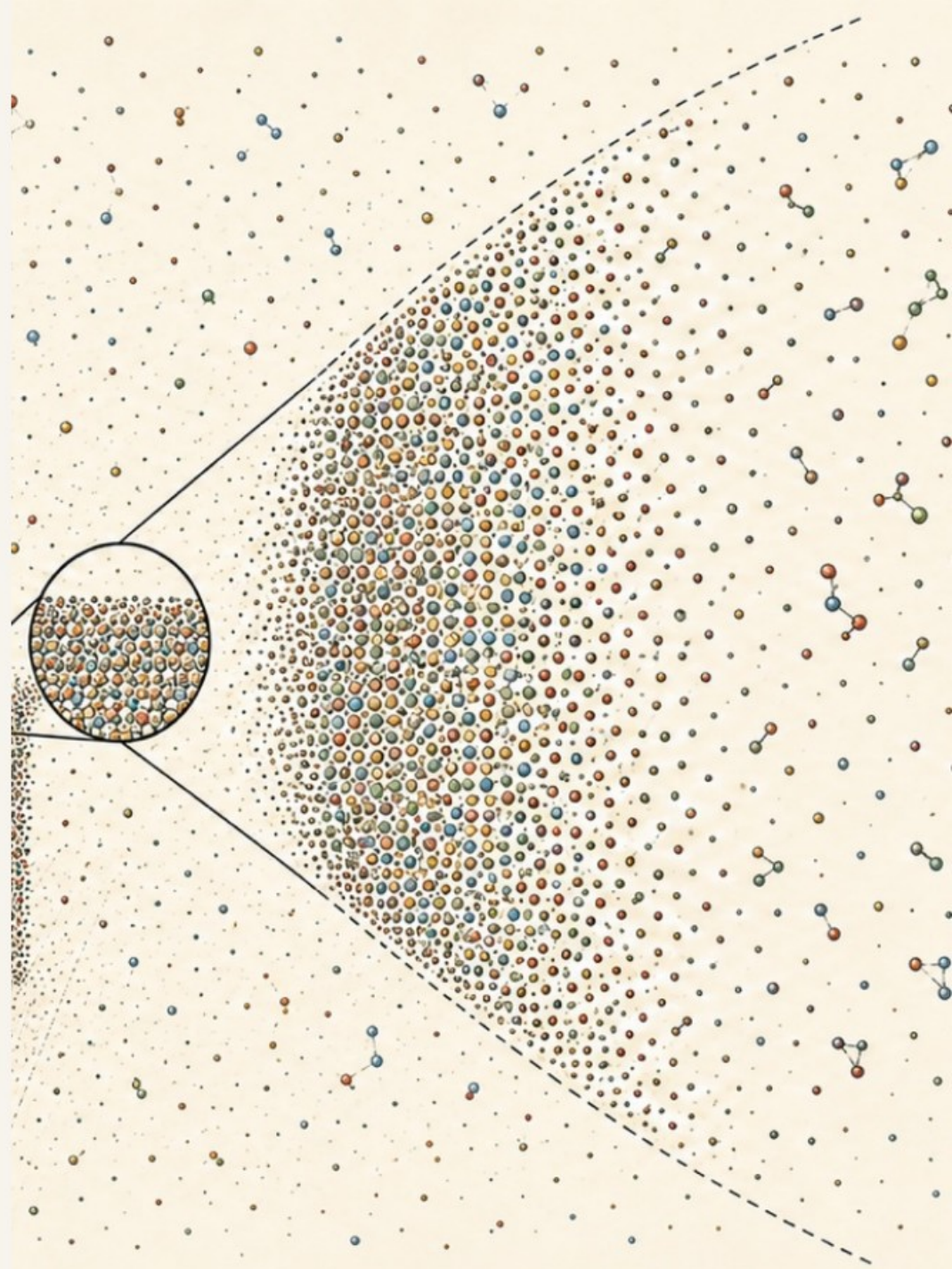


THE STRUCTURE OF THE BASE LAYER

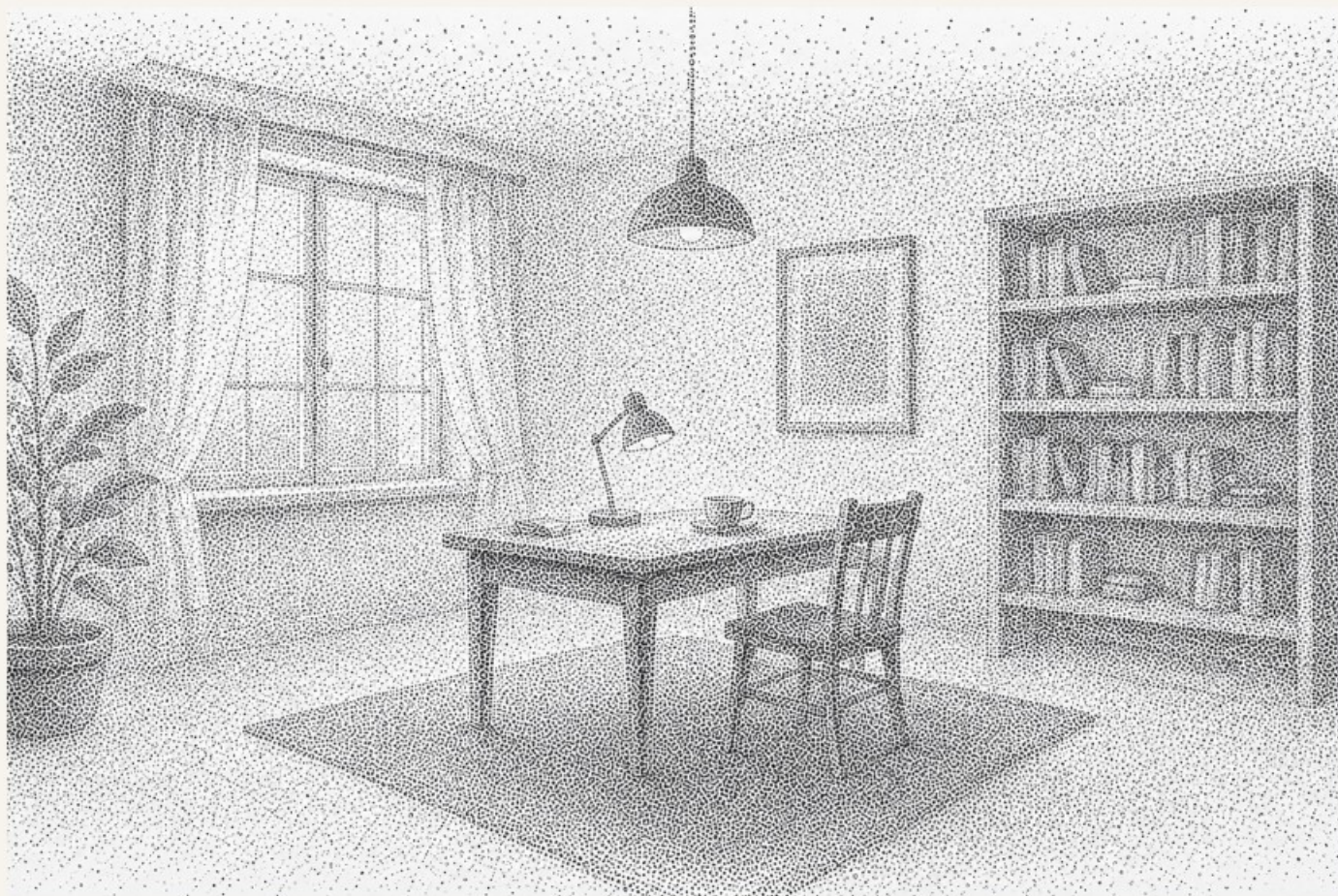
基層世界の構造

動的配列から具象が生成されるまで

生成構造研究 | 図解資料



日常の知覚は、世界を完成した「もの」として捉える



机

空気

植物

人間

名称・輪郭・用途によって、
それぞれが独立した対象として
現れる。

しかし、完成物は生成の結果であり、起点
ではない。

基層では、名称より先に「構成と関係」がある



対象を区別するのは、色や名称だけではない。

何で構成され、どのように並び、どの距離で作用し、
どのような運動をしているかによって、異なる状態が成立する。

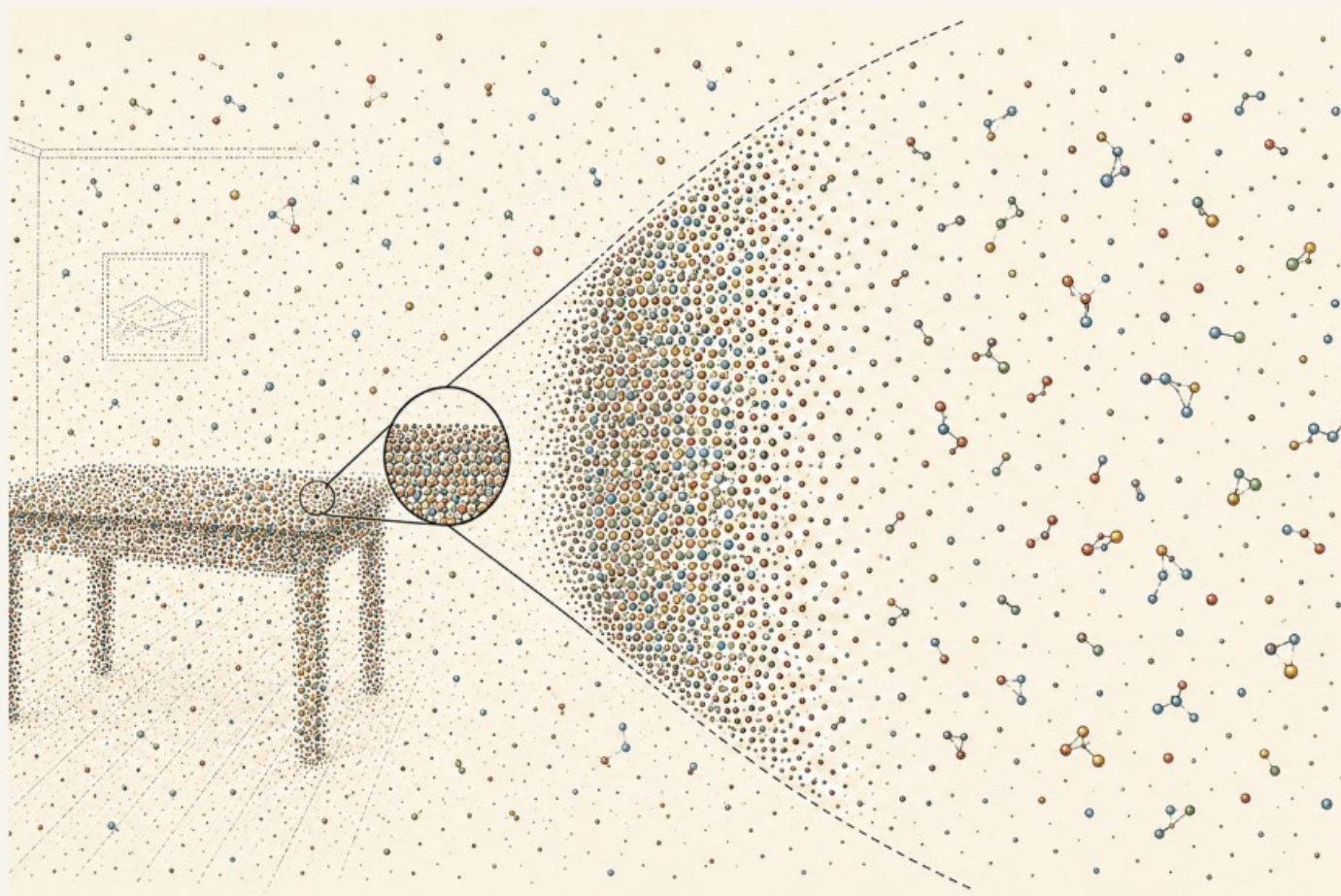
基層は動いているが、無秩序に溶けてはいない



安定とは、停止ではない。

運動する構成要素の関係が保たれることで、
輪郭と機能が継続して生成される。

机・空気・植物・人間は、異なる配列状態として現れる



机

高い密度
強い構造保持

空気

低い密度
移動と混合

植物

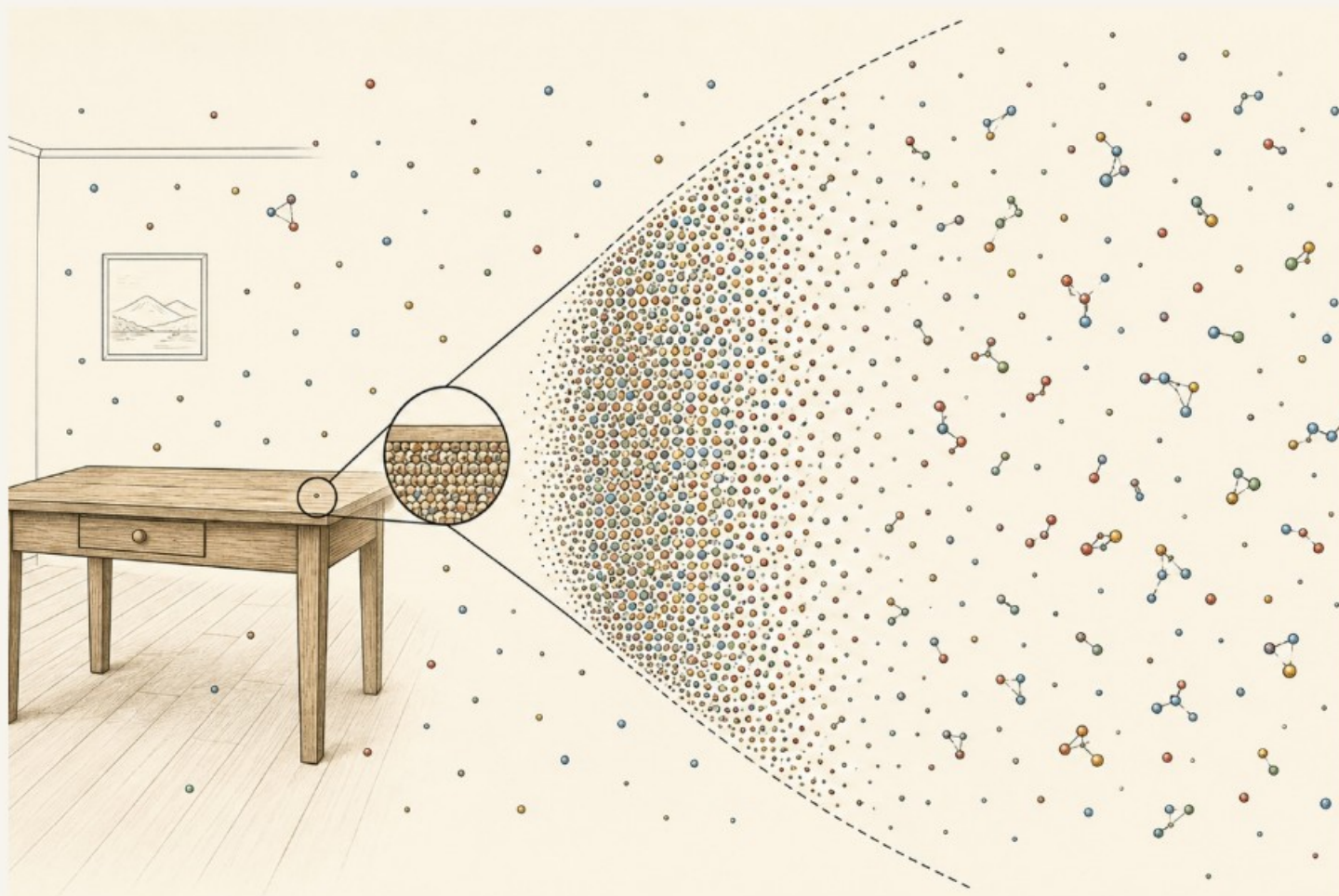
代謝・成長
環境との交換

人間

多層的な生命活動
知覚と行為

違いは「存在する／しない」ではなく、
構成・密度・運動様式の違いとして現れる。

境界は切断線ではなく、交換が続く領域である



物質

エネルギー

熱・光・空気・水分・接触・生命活動

机と空気、身体と環境のあいだでは、
絶えず作用と交換が起きている。

輪郭は存在する。
しかし、完全に閉じてはいない。

ミクロの関係が積み重なり、マクロの世界が立ち上がる



小さな要素を足し合わせるだけでは、全体は説明できない。

配置・距離・相互作用によって関係が形成され、
関係の階層化によって、別の縮尺の全体が生成される。

形成された全体は、再び各部分の状態へ作用する



温度、圧力、光、空気、接触、周囲との関係が、
内部の運動や配置、次の変化条件を変える。

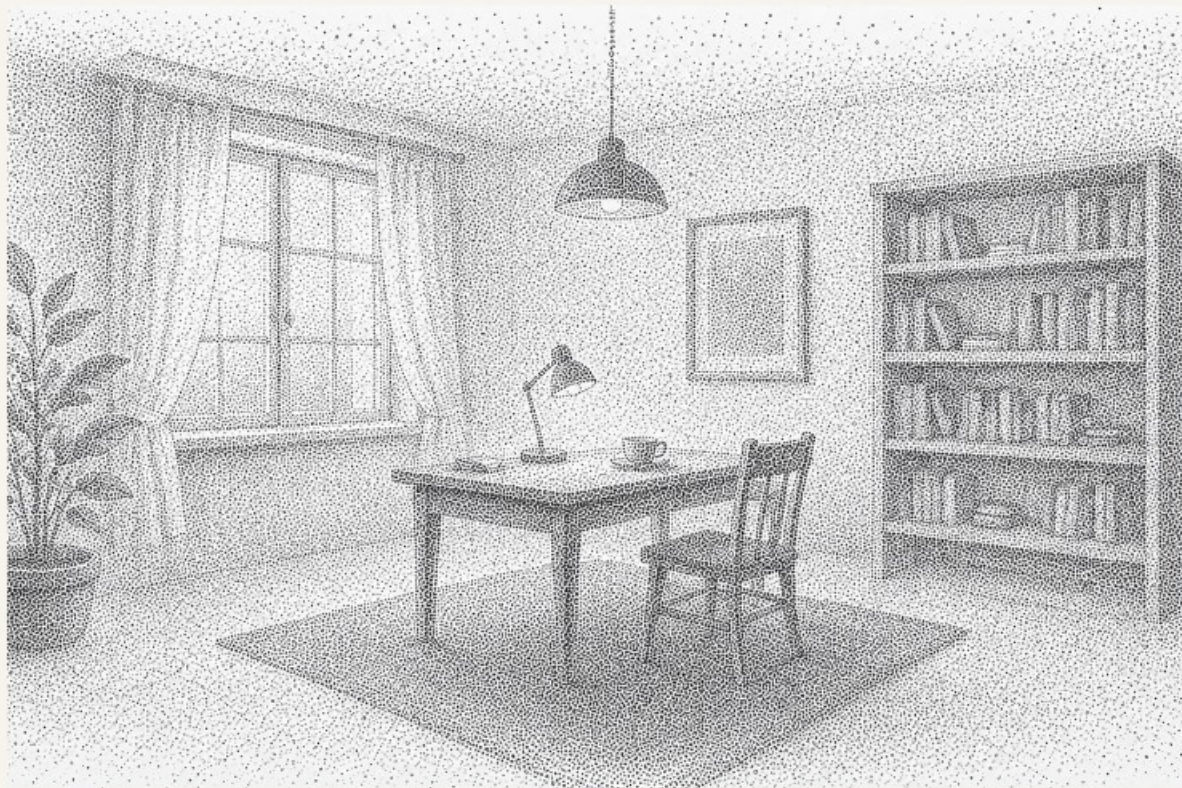
全体は部分の結果であると同時に、部分を変える条件でもある。

基層と具象は、一方向ではなく循環している



部分と全体が相互に作用し、
ある状態が次の状態の生成条件になる。

知覚は、無数の情報を一つの全体像へ統合する



色・形

運動

位置・奥行き

記憶・意味



「部屋」という統合像

知覚された具象は、世界の一つの統合形式である。

基層を見るときは、像の手前にある生成条件を見ることである

何で構成されているか

どのように関係しているか

何が次の変化を生むか

完成した対象を消すことではない。

完成した像と、その像を生成している無数の関係を、
異なる縮尺のまま同時に捉えることである。

基層世界とは、秩序ある運動が具象を生成し続ける世界である

無数の構成要素 → 関係と配列 → 具象世界

基層は、ぼんやりした霧でも、静止した部品の集合でもない。

動きながら法則を保ち、部分と全体を往復し、
人・生命・自然・社会の具象を生成し続ける構造である。

見えないから、曖昧なのではない。

**基層には、動きながら維持される
精密な関係と秩序がある。**